

本年度テーマ

主体的な学びや協働的な学びをととした学習のあり方について

事業内容

高知南：グローバル教育プログラム（探究型学習）について

概要・目的

本県におけるグローバル教育では、生徒が授業や課題研究に取り組む中で、論理的思考力や判断力、表現力を身につけるとともに、英語運用能力の向上を図り、将来グローバル人材として活躍できる資質を育成することを目的としている。生徒が学習を進めていく中で、どのような活動が必要で、それらをどのような手順で積み重ねていくのかについて、具体的に示して指導することが必要である。本年度は、平成 30 年度をイメージして協議する。

P 平成 29 年度の当初計画

4つの方向性と7つの方策

探究型学習プログラム+英語教育プログラム 協働による目標達成

方向性①

授業者は指導と評価の一体化を目指す

1. 生徒との目標の共有、目標達成につながる学習活動の設定と評価を通して、学習指導の改善を行う。

- ・生徒の学びのプロセスの見取り
- ・目標に沿った評価方法の研究
- ・英語教育での学習到達目標（CAN-DO リスト）の活用
- ・グローバル教育校内研修会（7/14 実施）における教科横断型の研究協議

方向性②

生徒は自己の学びを適切に振り返る

2. 主体的な学びにつながるよう、生徒の振り返りの手立てを工夫する。

方向性③

学校は教科会やチーム会を活性化

3. 高知南が目指す「グローバル人材」を再確認し、育てたい資質・能力を教科横断的に育成する授業づくりについて、学校全体で取り組む。
4. 組織的・協働的な授業づくりを目指し、教科会、チーム会を活性化

方向性④

学校と教育センターは研究成果を普及

5. 3 年間の研究成果を集約し、研究の過程や実践事例をまとめる。
6. 教員の授業づくりに対する意識の変化や生徒の学びに関する変容を見取るために、意識調査等を実施し、分析する。
7. 県内の教員のニーズに応えられるよう、教材研究や授業づくり、評価のポイント等の資料を作成する。

D 平成 29 年度の実績状況

取組①

○目標の明確化と生徒の学びの見取りについて

- ・協調学習やアクティブ・ラーニング型授業を探究型学習に位置付け、学習指導を工夫改善することを確認し、全体で取組を継続している。
- ・校内研修では、各教科で「(生徒が) 何ができるようになるか」の視点で協議し、授業の目標を明確にし、生徒と共有することを意識して授業づくりに取り組んでいる。
- ・生徒が「どのように学んでいるか」という学びのプロセスについて、単元や授業で見取することを重視した具体的な方法や実践例について、教科会等で協議し、授業している。

○グローバル教育校内研究会における研究授業と研究協議について

- ・第 1 回グローバル教育校内研修会において、「(生徒は、教科を学習することで) 何ができるようになったか」を共通の視点として研究授業・研究協議を実施した。授業者は、生徒の資質・能力を育成することを明確にした目標を設定し、その実現状況を適切に見取る工夫について提案する授業実践を行った。
(研究授業…中 1 英語・中 2 社会・高 1 C E I・高 1 化学基礎・高 2 数学 A)
- ・研究協議では、「適切な授業目標の設定や評価についてどのような工夫をしているか」について各教科で話し合い、2 学期以降の取組に生かすようにした。

取組②

- ・チーム会において、生徒に学びの振り返りを行わせることの意味と、評価を教職員が組織的・協働的に研究することの効果について研修した。研修後には、「本時で分かったこと」、「理解が深まったこと」、「他者から得た気づき」などを生徒自身に振り返りをさせる手立てをとるなどの実践が見られた。
- ・生徒にゴールイメージを持たせ、ゴールへの到達度を生徒自身が振り返るような工夫を行うことの意義や具体的な方法をチーム会で検討した。生徒がルーブリックを活用し、自己評価する授業づくりを目指すように、事例研究を継続していく。(取組③とも関連)

取組③

- ・校内研修会（8/2 実施）において、「高知南版グローバル教育とは」について確認し、「これからのグローバル社会を生きる生徒に、気付く・考える・表現する力を授業でどのように付けていくか」について、教科を横断したグループで協議を行い、目指す生徒像を考えた。また、研究授業（7/14）の授業者が「単元でどのような力を身に付けさせようとしたか」について発表した後、生徒の学びをどのように見取るかについて全教職員で協議し、理解を深めた。
- ・10 月末までに、チーム会を 5 回開催した。探究型学習の研究の視点や、授業づくりのポイント、生徒の振り返りや評価の在り方について協議した。また、研究発表会における研究授業の授業案を教科を横断して検討することで、協働的な研究体制を構築した。
- ・チーム会において、ルーブリックなどを用いた多様な評価の在り方について研修した。具体的な方法を各自で考え、次回以降のチーム会で協議していく。

取組④

- ・学校は研究報告書を作成し、センターが探究型学習の事例と授業づくりについての啓発資料を作成することとした。
- ・第 1 回探究型学習に関するアンケート（7 月実施）を全教職員対象に実施し、結果をチーム会と職員会にて周知した。

C A 課題（●）と今後の取組の方向性（→）

※課題を検証するにあたり、「第 1 回探究型学習に関する教職員アンケート（7 月実施）」を用いた。アンケートは、高知南中高における対象教員（時間講師と実習助手を除く）74 名中 68 名（約 92%）が回答した。
なお、回答については「とてもあてはまる」・「あてはまる」を「肯定的回答」、「あまりあてはまらない」・「あてはまらない」を「否定的回答」とした。

取組①

- 高等学校では、「授業で目標を設定し、生徒と共有している」に課題が見られる。（「日々の授業において、毎時間目標を設定し、生徒と共有している」…否定的回答 23.9%）
→授業の目標を板書するなど、授業で目指す目標を生徒と共有する工夫をし、授業後には、生徒自身が目標を達成できたかどうかを振り返ることを徹底する。（取組②とも関連）
- 生徒の学びを多様な評価手法を用いて評価することが進んでいない。（「ルーブリックやポートフォリオなどで生徒の学びを評価している」…肯定的回答 26.9%）
→生徒の「思考力・判断力・表現力」を適切に評価するためにパフォーマンス評価を用いる。特に、生徒に身に付けさせたい力を「単元」で設定し、それを見取るための「ルーブリック」を作成する。（各教科で最低 1 事例を作成し、授業での活用について事例研究を行う）。

取組②

- 「生徒自身の振り返り」を授業で意図的に行っている割合が半数以下であり、全体的な取組となっていない。（「毎時間、生徒が振り返りを行っている」…肯定的回答 46.4%）
→全教職員の授業改善の視点に「生徒の振り返り」を設定し、授業でその時間を確保するようにする。また、2 学期の公開授業では「生徒の振り返り」を全体的に取り組むことを徹底する。

取組③

- 教材研究や指導案作成等の教科会を定期的には実施できない。
→月に 1 回は中高合同の教科会を各教科が開催できるように時間割を設定し、組織的な授業づくりを行うようにする。
→今後は「グローバル教育研究発表会」（2/9 開催）での研究授業に向けて、チーム会を 2 回開催し（10 月・12 月）、教科を横断して、教材研究や学習指導案作成を行う。
- 教科会やチーム会を中心とした P D C A サイクルが確立されていない。
→学校は、年度末までに、3 年間の成果と課題を検証する。
→学校は、年度末までに、次年度に向けて、生徒の論理的思考力、判断力、表現力を育成する視点での教科横断的な取組を計画する。

取組④

- 探究型学習の授業づくりに関する教職員の意識や実際の取組状況を把握し、研究に生かしていく必要がある。
→「第 2 回探究型学習に関するアンケート」を 11 月に実施し、第 1 回と比較、分析して、研究のまとめに生かす。
→中高の各教科における実践事例を集約し、探究型学習における各教科での成果を、年度末までに整理する。そして、3 年間の実践事例集を作成し、県内の中・高等学校に普及啓発する予定である。
→次年度に向けて、ポートフォリオなどの評価と学習の定着度をはかるテスト作成について研究する。